幼児の嘘の理解に関する発達的検討

――嘘をつく，つかれる状況下の比較を通して――

18001PAM　北野　彩佳

Ⅰ．問題と目的

子どもの嘘の研究は自己防衛的嘘（水口ら，2011）と思いやり的嘘（島，2015）それぞれで研究されており，二者間の発達的な関連は検討されていない。そのため二者間の発達の過程の関連を明らかにすることを第１の目的とする。先行研究を再考すれば，自己防衛的嘘先行で発達し，あとから思いやり的嘘が発達するだろう（仮説 1)。また，嘘をつく側ばかりの研究であり，嘘をつかれたときに子どもがどれほど嘘の内容を理解しているのか不明である。嘘の発達の全体像を把握するためにも嘘をつく側とつかれる側の両輪の発達過程と関連性を検討することを第 2 の目的とする。さらに，嘘をつく際に心の理論と葛藤抑制能力は関連があると示されている（例えば、瀬野，2008)。しかしながら，嘘をつかれるときにそれらが必要な能力であるかについては検討されていない。そこで，心の理論と葛藤抑制能力が嘘をつかれるときにも関連しているかどうか検討することを第３の目的とする。先行研究を再考すれば，嘘をつかれたときも相手が自分と違う信念を持っているのか考えるため心の理論の影響があるだろう。葛藤抑制能力は真実を言う事を抑制するために必要であるが，嘘をつかれたときに必要であるとは限らないため，嘘をつかれた能力との関連は見られないだろう（仮説 2)。これら 2 つの能力が嘘をつかれたときに必要であった場合，どちらがより影響を与えているのか検討することを第４の目的とする。関連があった場合，心の理論の方が影響が強いだろう（仮説 3)。

Ⅱ．方法

要因計画　実験 1：3（年齢；年少，年中，年長）×2（嘘の内容；自己防衛的嘘，思いやり的嘘）×2（嘘の状況；つくとき，つかれるとき）の３要因混合計画であった。

実験参加児　実験１および２(同様の子ども)：年少児 10 名，年中児 12 名，年長児 10 名。

刺激および手続き　実験１：自己防衛的嘘をつく，思いやり的嘘をつく，自己防衛的嘘をつかれる，思いやり的嘘をつかれる，の４つの条件につきそれぞれ５種類のストーリーを作成し，理解しやすいようにパワーポイントでイラストを呈示しながら読み聞かせを行った。

いずれも日常生活においても不自然ではない状況設定をするために溝川（2007）を参考に作成した。ストーリーを読み聞かせした後，内容を理解しているか尋ねる内容理解質問をし，正答であった場合，１問１点（20 点満点）を付与し，その後，ストーリーに合わせた嘘を回答できるか嘘理解質問を行った。嘘理解質問については回答の理由も尋ねた。　実験 2：心の理論課題は DIK 教育出版のアニメーション版心の理論課題を用いて行った。赤／青課題は子安・小川（2008）を参考に行った。

Ⅲ．結果と考察

実験１：内容理解質問の平均得点に関して（表 1）要因計画に従い、3×2×2 の 3 要因混合分散分析を行ったところ，年齢の主効果が有意であった（$F(2,29)=10.467$, $p<.001$)。多重比較の結果，年長児は年少児（$p<.001$)，年中児（$p<.005$）よりも有意に得点が高いことが示された。嘘の内容の主効果および，全ての交互作用は見られなかったため，仮説１は支持されなかった。内容理解質問に正答した実験参加児（自己防衛的嘘をつく条件 54%，思いやり的嘘をつく条件 55%，自己防衛的嘘をつかれる条件 80%，思いやり的嘘をつ

かれる条件 71%）を対象に，嘘の理由付けを課題の内容と一致か不一致の 2 つに分類し，条件ごとに χ^2 検定を行った。その結果，思いやり的嘘をつく内容と理由付けには有意な関連が見られ（χ^2（2）=12.560，p<.01），思いやり的嘘をつかれる内容と理由付けにも有意な関連が見られた（χ^2（2）=6.003，p<.05）。その結果，いずれも年少児から年長児になるに従って，嘘の内容と一致した理由付けが可能になることがわかった。

実験 2：赤／青課題の得点を年齢を水準として 1 要因分散分析を行ったところ，有意な差が見られなかった（F（2,29）=0.948，ns）。誤信念課題の得点を年齢を水準として 1 要因分散分析を行ったところ，1%水準で有意な差が見られた（F(2,29)=28.031，p<.001）。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ，年少児と年中児，年長児の間でそれぞれ有意な差がみられた（ps<.001）。嘘課題と葛藤抑制能力と心の理論の関連について重回帰分析を行った結果，有意な関連が見られたのは思いやり的嘘をつく課題と心の理論のみであったため（p<.05），仮説 2 は支持されなかった。「嘘はいけない」「本当のことを言わないといけない」といった，そもそも嘘をつくことを拒否する回答が多かったことから，幼児は自分自身のために嘘をつくよりも嘘はいけないといった道徳的な考えを優先させていた可能性がある。目的 3 で有意な関連が見られなかったため仮説 3 も支持されなかった。

Ⅳ．総合考察

本研究では嘘理解質問の得点は，嘘をつかれる状況（受動態）の方が，嘘をつく状況（能動態）よりも高いという結果となった。一方，言語能力の発達についての研究では，受動態よりも能動態の方が先行である（落合・水野，1979）。二者の研究の差異の理由として，嘘をつくことが，単に言語発達のみならず，心の理論の行使が伴うためであろう。心の理論課題を達成するのは 3～4 歳児で約 4 割ほどである（瓜生，2007）。しかし，嘘をつくためには相手が何を思っているのか考える必要があり，心の理論が発達していない幼児では嘘をつくことは難しいとされる。

このことは，本研究の 4 つの条件の嘘課題と心の理論，葛藤抑制能力の重回帰分析を行った結果からもわかる。思いやり的嘘をつく課題と心の理論のみに有意な標準偏回帰係数がみられた。一方で，葛藤抑制能力は全ての課題で有意な標準偏回帰係数が見られなかった。この結果は，幼児の道徳性が嘘をつくことに大きな影響を与えている可能性も否めない。年少児の約 25%，年長児の約 83%が嘘は悪いとし，大人からの評価が悪くなると言及している（上宮・仲，2009）。嘘をつくことが悪いことだという罪悪感や，嘘をつくことで怒られることを避けたいという気持ちが嘘をつくことに対し影響を与えていると考えられる。さらに，葛藤抑制が未熟なため，嘘をつくことがまだできなかったかもしれない。すなわち，「真実を話すこと」を抑えられず，話してしまい，嘘をつくレベルにまで達していない可能性がある。嘘をつくことはこのような多種のより高次な認知的能力が必要となるため，嘘をつかれたときよりも発達を待たねばならないだろう。

嘘の理解に関する総合的な能力として，先行研究で行われてきた自己防衛的嘘，思いやり的嘘といった嘘の内容の発達差は顕著ではなく，嘘をつく，つかれるといった嘘の状況での発達差が生じることが分かった。嘘をつかれた状況では比較的，状況や言語理解のみで理解できるため発達が先行し，嘘をつくためにはそれらの能力に加え，心の理論や抑制能力，道徳性といった高次の認知能力が必要と考えられるため，発達が遅れるのではないだろうか。今後は道徳性や罪悪感などの発達も加味して嘘の理解の発達を包括的に検討する必要があろう。

表 1　年齢別嘘理解質問の平均得点

	嘘をつく		嘘をつかれる	
	自己防衛的理由	思いやり的理由	自己防衛的理由	思いやり的理由
年少児	2.1 (1.0)	1.9 (1.0)	3.5 (1.4)	3.1 (1.3)
年中児	2.9 (1.5)	2.3 (1.4)	3.9 (1.5)	3.3 (1.6)
年長児	3.1 (1.4)	4.1 (1.0)	4.6 (1.0)	4.3 (1.3)